

テーマ

## 13 日本古代の家族とは

清家 章

## 1 はじめに

博物館や考古学概説書によくみられる原始・古代の家族の復元図やジオラマでは、大人の男女と子供達が堅穴住居に住み、炉や竈で煮炊きが行われ、土器や木製の器に食事が盛られている・・・という風景が良く描かれる。これらはどれだけ正確なのであろうか。考古学は、いうまでもなく遺物・遺構とその複合体である遺跡を主な分析対象とする。したがって、遺物・遺構の使用方法の研究や技術的分析は精緻に進んでいるので、堅穴住居の構造や土器の使用法などは一定の根拠があり、正確に復元されている箇所は多い。しかし、それらを使用していた人々については、研究が遅れている。

そもそも住居に何人住んでいたかも、黒井峯遺跡の検討があるものの（石井 1996）確定的ではないし、ジオラマにおける大人の男女は「夫婦」であると観覧者は自然ととらえるが、「夫婦」が同じ住居に住んでいたかは証明がされているわけではない。ジオラマや復元図での「人」に関する情報はかなりの部分は想像によっていることがわかっていうものだ。

人類学的研究からは身長や顔つきが復元され、また、親族構造や家族の成立については戸籍・計帳・法令から、文献史家がその分野をリードし、民族研究からもその分野での貢献があった。もちろん、考古学も、土偶や埴輪あるいは装飾品・繊維の研究からその姿形の復元を行ってきた。ただ、それはハード面に限られ、婚姻の仕組みや居住形態、個人と集団の関係などソフト面については研究が弱かったと言えよう。

## 2 考古学的分析の論点と課題

考古学は親族集団や家族の研究を怠ってきたわけではない。考古資料の分析を通じても親族集団や家族の実態に迫ろうと多くの研究者がしのぎを削ってきた。考古学における家族研究は膨大な数がある。ここでは筆者の専門とする古墳時代を取り上げ、その現状と課題について述べることにす

る。

古墳時代家族の復元は、集落・住居跡から追求されることもあるが、むしろ墳墓からの研究が多い。集落・住居跡の分析からは単位集団や世帯あるいは世帯共同体などと理解される小集団を抽出し、その小集団あるいは小集団が集落の中でどのような関係を持ち、それぞれがどのような性格を持つのか研究が積み重ねられている。しかしながら、住居の同時性については疑問視されることが多く、客観的なグルーピングも困難であることがつとに指摘される（関口 2004・杉井 2005 など）。親族構造・家族の研究はいきおい墳墓資料を中心として行われることになる。

しかし、考古学の方法では、明らかにできることが限られていた。そのため、男女ペアが埋葬される場合には、その関係が夫婦であることが前提に議論されることも多かったのである。そうした趨勢の中、田中良之は人類学的分析と考古学の情報を組み合わせて、被葬者間の血縁関係を推測し、親族構造を明らかにしたのであった。田中の分析は画期的であり、20 世紀における親族研究の金字塔と評価できる（田中 1995）。田中は考古学の発掘情報を念頭に置きつつ、歯冠計測値と非計測的形質などの遺伝的情報が反映される特徴から人骨間の親族関係を明らかにし、被葬者の親族モデルを推測したのであった。すなわち、キョウダイを中心とした血縁者を埋葬する基本モデルⅠ、成人男性とその子供の世代が葬られる基本モデルⅡ、モデルⅡに家長の妻と考えられる人物が埋葬されるようになった基本モデルⅢである。基本モデルⅠでは被葬者の選択に男女で違いが無く双系的であるが、初葬者が男性に限定される基本モデルⅡとⅢは父系的であり、双系的な基本モデルⅠから父系的な基本モデルⅡへ変化する 5 世紀後半が大きな画期として理解されている。筆者も田中の方法を用いつつ、副葬品や埋葬施設分析も加え親族構造の変化を問うた。その結果、キョウダイ原理の埋葬は古墳時代を通して主流の埋葬原理で

あること、さらに父系化は首長層から進行する一方で、古墳時代後期にいたっても父系化は貫徹していないとの結論に達した（清家 2010）。

田中と筆者の隔たりは小さくはない。とくに後期における父系化の浸透度は、群集墳と中央政権の支配体制の理解に関わり、律令期の研究とも繋がってくる。群集墳の理解には、近藤義郎(1952)と西嶋定生(1961)の論争から始まって、大きく分けて2つの潮流がある。前者は、「家父長的な秩序が（中略）強く貫徹」し、家父長制的家族が台頭した結果、群集墳が成立するとみるのに対し、後者は、「大和政権の地方支配」が「貫徹」され、中央政権の掌握の結果が群集墳と理解する。家父長制的秩序はすなわち父系的秩序であり、中央政権の支配が家族レベルにまで及ぶとすれば、その集団は父系的であることが望ましい。集団の継続と地位継承が双系より父系の方が単純で、その掌握は後者がよりたやすいと考えられるからである。とするならば、近藤と西嶋、あるいはその説を継承する者は、意識するしないに関わらず、群集墳の成立と父系化の関係を支持していることになる。このことは文献史と深刻な不連続を生み出している。田中が示した家族結合の延長上に、より洗練された父系血縁集団として8世紀の家族を置くことは困難であると坂上康俊が述べるが（坂上 2004）、古墳時代父系説論者についてはすべからず、古代双系制説（吉田 1982）が有力な文献史の通説と連続しないのである。

### 3 親族構造・家族研究の課題

こと古墳時代に限れば、古墳時代後期から終末期の親族構造は大きな課題として残されていることがわかるであろう。とくに横穴式石室における分析は、良好な古人骨資料が少ないので分析された事例がほとんどない。横穴式石室という新しい原理の埋葬施設が非首長層に普及する時、新たな親族原理が導入されている可能性は否定できない。ましてや群集墳の成立が父系化と関わるとの説が示されてきたので、なおさらである。

集落と墓制研究のリンクも重要である。墳墓から復元される親族構造が集落や住居の構造と適合するのか否か。冒頭に示した通り、集落・住居から親族構造や家族形態を問う事は困難がつきまと

うが、親族・家族の復元に、生活の場である集落と住居からの議論の積み重ねは不可欠であろう。方法論を鍛え、この方面から立論を行っていく必要がある。

また、歯冠計測値を用いた血縁関係について方法論的課題も指摘されている。歯冠計測値は、「他人の空似」が含まれる可能性を持ち、父親似と母親似のキョウダイをそれと判別できないことが、その方法論が案出された当初から指摘されている。古人骨研究も万能ではない。ただ、田中にしても筆者にしても、歯冠計測値だけに依拠して立論しているのではなく、考古資料や文献史料をも用いて総合的に研究を進めている。D.N.A. 分析も含め、精度や汎用性のより高い分析法を今後も鍛えていく必要がある。

### 4 おわりに

このように親族研究・家族研究は古墳時代においてすら、課題は多く残されている。時代に限らず方法論を鍛え、分析を重ねていく必要があろう。学問的にもそうだが、家族形態は、展示や概説に欠かせない要素である。そのために我々は研究を進めていく必要があろう。

### 参考文献

- 石井克己 1996 「歴史を埋めた火山灰」『発見と考古学』市民の考古学3、名著出版、pp. 277-322
- 近藤義郎 1952 「(佐良山古墳群における) 問題の所在」『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市
- 坂上康俊 2004 「律令国家の法と社会」『日本史講座』第2巻律令国家の展開 東京大学出版会、pp. 1-31
- 杉井健 2005 「古墳時代集落研究序論」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学友の会、pp. 755-788
- 清家 章 2010 『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 関口裕子 2004 『日本古代家族史の研究』下 塙書房
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究—人骨が語る古代社会—』柏書房
- 西嶋定生 1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』10号 岡山大学法文学部
- 吉田孝 1982 『律令国家と古代の社会』岩波書店